ハンブルク交響楽団と首席指揮者のカンブルラン ©J. Konrad Schmidt

シルヴァン・カンブルランが読響常任指揮者として最後の演奏 会を指揮した約半年前の2018年10月、彼はドイツのハンブルク で新たなスタートを切っていた。ハンブルク交響楽団(ハンブル ガー・シンフォニカー、以下シンフォニカーと表記)の首席指揮者 への就任である。

カンブルランにとっても、予想外の青務だったといえるかもしれ ない。次のような経緯があった。2009年から首席指揮者を務め ていたジェフリー・テイトが、2017年6月予期せぬ形でイタリア のベルガモにて急逝した。楽団と聴衆が悲しみに暮れる中、 2017/18年シーズンの第2回シンフォニーコンサートで指揮を任 されたのがカンブルランだった。もともとテイトが指揮するはず だったデュティユー、マルク=アンドレ・ダルバヴィ、ドビュッシーと いう得意のフランス・プロを指揮し、大成功に導いたのである。

読響での任期の終わりが近づき、間もなくフリーランスになる うとしていたこのマエストロを、クラシック音楽界が放っておくこ とはなかったようだ。齢70にして、カンブルランはハンザ都市ハ ンブルクの楽団のシェフに就任した。

2018年10月に行われた就任演奏会で、カンブルランはいきな り彼ならではのプログラムの妙をハンブルクの聴衆に披露する。 ラッヘンマンの〈塵〉、ベートーヴェンの交響曲第9番、さらにシェ

ーンベルクの〈ワルシャワの牛き残り〉を一夜で 演奏したのである。兄弟愛を高らかに謳った〈第 九〉。その理想が120年後、ユダヤ人の絶滅計 画であるホロコーストへと至った歴史を想起さ せる〈ワルシャワの生き残り〉。さらに〈第九〉が スキャンダラスな形で引喩されているラッヘン マン作品を並べる大胆さ。結果的に、終演後は スタンディングオベーションとなり、地元紙の『ハ ンブルガー・アーベントブラット』は「カンブル ランを新しいシェフに選んだシンフォニカーは 幸運だ」と新コンビの船出を讃えたのだった。



ハンブルクで生まれた近代「オーケストラ」

ここでハンブルクのオーケストラ界を少しご紹介したい。ハンブルクの楽 団でまず名前が挙がるのが、NDRエルプフィルハーモニー管弦楽団(1945) 年設立) だろう。今でも北ドイツ放送交響楽団の旧称の方に馴染みがあると いうファンは多いかもしれない。2019年からアラン・ギルバートが首席指揮 者を務めている。そして、2015年からケント・ナガノがGMD(音楽総監督) を務めるハンブルク州立歌劇場(1678年設立)の座付オケ、ハンブルク・フ ィルハーモニカー。この二つの楽団は、港に面した話題の新コンサートホール、 エルプフィルハーモニーを拠点にしている。

対するハンブルク交響楽団(1957年設立)は、上記二つの楽団に比べて 歴史は浅いものの、響きの美しいコンサートホール、ライスハレを拠点に独 自色の濃い活動を展開している。それは数年前にインテンダント(総裁)の ダニエル・キューネルが導入した「Das denkende Orchester (考えるオー ケストラ)」というコンセプトだ。そもそもオーケストラという言葉は古代ギリ シャ語に由来し、「文化や宗教、哲学といった主題が、演劇や音楽といった文 脈の中で議論されるポリスの中心に位置する場所」を意味した。オーケスト ラという言葉が「大規模な器楽アンサンブル」という今日的な意味で定着す るのは、ハンブルクの音楽理論家ヨハン・マッテゾン(1681~1764)が 1713年に出版した著作『Das neueröffnete Orchestre (新たに始まったオーケストラ)』で使って以降のこと。まさにハンブルクは古代のオーケストラという概念を近代に蘇らせた場所なのである。



インテンダントのキューネル氏とともに

シンフォニカーの「考えるオーケスト

ラ」というコンセプトに「すぐに共感した」というカンブルランは、今年1月ドイツの音楽雑誌『Concerti』のインタビューでこう語っている。

「人がコンサートホールに足を運ぶのは、『日常を忘れて、音楽でリラックスできるから』なのでしょうか。私は、もう少し違うものであるべきと考えています。芸術、その中でも特に音楽は、人生における意味や存在への問いに導くものです。多くの聴衆とはこの考えを共有できると思います。もちろん新聞で情報を見て、ふらっとコンサートに来るお客さんもいらっしゃるでしょう。そういう方にもわれわれは意外性と驚きを与えたい。コンサートホールはそれができる場所なのですから」

レパートリーの上でも、カンブルランはテイトが築いた土台を生かしつつ、 彼ならではの方向性を定めつつある。この2シーズンのプログラムを見ると、 モーツァルト、ベートーヴェンといったウィーン古典派から、シューマン、リスト、 ベルリオーズというロマン派、さらにオール・ラヴェルのプログラム、シマノフ スキの〈スターバト・マーテル〉とシューベルトのミサ曲を組み合わせた一夜、 プロコフィエフのピアノ協奏曲第3番(ソロはマルタ・アルゲリッチ)とチャイ



コフスキーの交響曲第5 番など、カラフルなライ ンナップが並ぶ。自ら聴 衆にレクチャーしながら 曲の魅力を解き明かす「プ ロ・ローグ (Pro-Log)・ コンサート」では、読響 でも取り上げた、ジェラ ール・グリゼーの (パル シエル〉を演奏。「娯楽性は必要です。でも、シンフォニーオーケストラの主たる役割がそれであってはいけない。私はリスクを取ることをやめたくないのです」というカンブルランの姿勢は、もともと進取的な土壌のあるハンブルクでも自然と受け入れられているようだ。

アコースティックな音への渇望

グリゼーといえば、筆者は3月末にベルリン・フィルハーモニーで行われるはずだったカンブルラン指揮ユンゲ・ドイチュ・フィルとアンサンブル・モデルンによる〈音響空間〉の演奏を楽しみにしていた。しかし、新型コロナウイルスの影響により公演は中止。ドイツの各州では、8月末までを目処に劇場やコンサートホールの催しが禁止される状況が続いている。

マエストロの近況を知りたいと思いシンフォニカーのホームページを開いてみると、この楽団はなんとほぼ連日ライスハレから室内楽や朗読、インテンダントや音楽家による討論や楽器紹介を行って、オンラインで配信しているではないか。さすが「考えるオーケストラ」である。

4月14日の配信ではカンブルランがブリュッセルの自宅からトークに参加し、 最後にこんなことを力説した。

「皆さんが毎日のようにネットを通して音楽を届けているのは素晴らしい。でも、聴衆にとっては電気を通した音であることに変わりはないのです。舞台の上の音楽家と客席の聴衆という人間同士が生み出すシンフォニーの響きは、それとはまったく異なるもの。たとえこの状況が長く続いたとしても、アコースティックな音への渇望を失ってはなりません。私は再びホールで生の音楽が聴ける日を待っています」

カンブルランの言葉は、同じ状況に置かれた読響のメンバーや聴衆にも届くはずだ。この6月、カンブルランが退任後初めて読響の舞台に戻ってくる。10月には、メシアン〈我らの主、イエス・キリストの変容〉という大作での共演も控える。間もなく始まるカンブルランと読響の第2章では、この困難な状況下だからこそ、これまで培ってきた人間的な信頼を土台に、一層深みのある音楽的成果が育まれる予感がする。